

失なわれた音を求めて

6C33C-Bppモノーラル 2chパワーアンプ

佐久間 駿



序章

6C33C-B pp パワーアンプをついに組み上げる。今日は12月20日、冬至を2日後に控えた底冷えのする1日だった。部品の手配をしてから1年、設計を想いつてからゆうに2年は経過している。アルテックをつなぎ音を出してみる。過日、店のBGM用にとCDからDATにダビングしたテープを回す。好きなバラードばかりを収録したものだ。

ゴードンのテナーが深々とした音色で歌いあげる。“CRY ME A RIVER”, “TENDERLY”, そしてあの, “THE SHADOW OF YOUR SMILE”. ゴードンという人は小細工をせずストレートに大きくまわっていく。それでいて他のサクソプレーヤーには表現できない現代人の倦怠と退廃を見事に表現しているように僕には想えるのだが。アート・ペッパーが登場した。“OVER THE RAINBOW”. ペッパーのアルトはバップをやらせると、まるで様にならないが、こういうバラードを吹かせると絶品である。さすがアドリブの名手だ。原曲よりもっと、いい曲に仕立ててしまう。ゴードンに比べてペッパーのバラードは泣きが入って多分に感傷的である。しかしすば

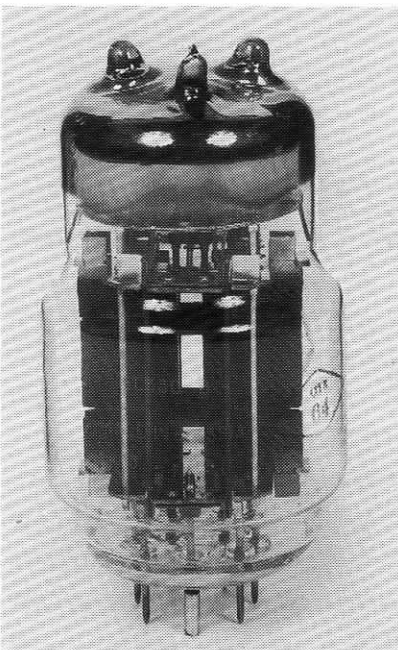
らしい。ペッパーならではのベストプレイだ。

ソビエトが崩壊し、6C33Cが多く出回り始めた2年前ごろ、僕はこの球を仮想敵国に仕立てあげ、出力トランス付きで、30~50Wのパワーアンプの製作を目論んできた。その試作機ともいべきアンプをMJ 1993年7月号においてお披露目させたが、あれはあくまで試作であって本命は今回の845ドライブ6C33C pp パワーアンプだ。

7月号の試作機はありあわせのパーツを用い、この6C33Cがトランス

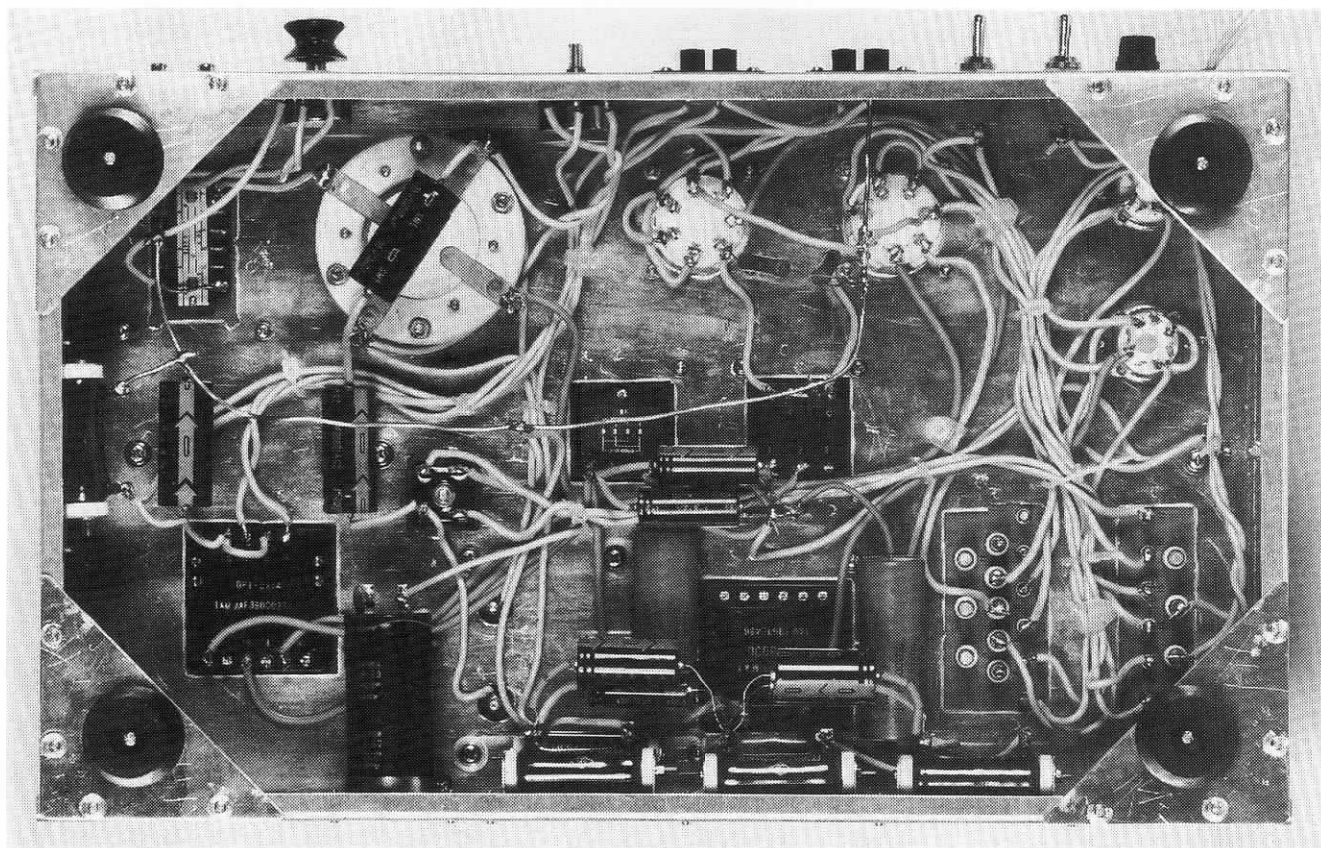
付きでどの位の威力を秘めているのかを窺い知ることが目的だった。そのため手持ちの3kΩの出力トランスを用い、実験的な目論みを兼ねての製作であったが、それなりに十分鑑賞に耐える音で鳴ってくれた。パワーも10Wはなんとか確保でき、現在でも低域を6C33Cs、そして中音域を4P55s 2チャンネルパワーアンプとして活躍中である。このありあわせのパーツを用いた試作機のたしかな手ごたえが、僕をより強く本機845ドライブ6C33C pp パワーアンプ製作へとかりたてたと言っても過言ではない。

6C33C-B



意を決して、久々にタムラ製作所の塩沢技術部長に電話を入れたのが1993年7月のことだ。至急電源トランスと出力トランスの試作を依頼するためだ。ここ何年か試作品は皆無とっていいほど使用していない。できればカタログ製品のみでやっていきたいからだ。しかし今回は何となく胸が騒いだ。845ドライブの845 pp パワーアンプを作ってからのことだ。それだけ6C33Cという球に、想い入れが強かったのだろう。久しく絶えていたある種の動物的な勘が目を覚ましたと言ってもいいかもしれない。

トランスが届いたのが11月中旬だった。50, 300B, 845そして6C33C

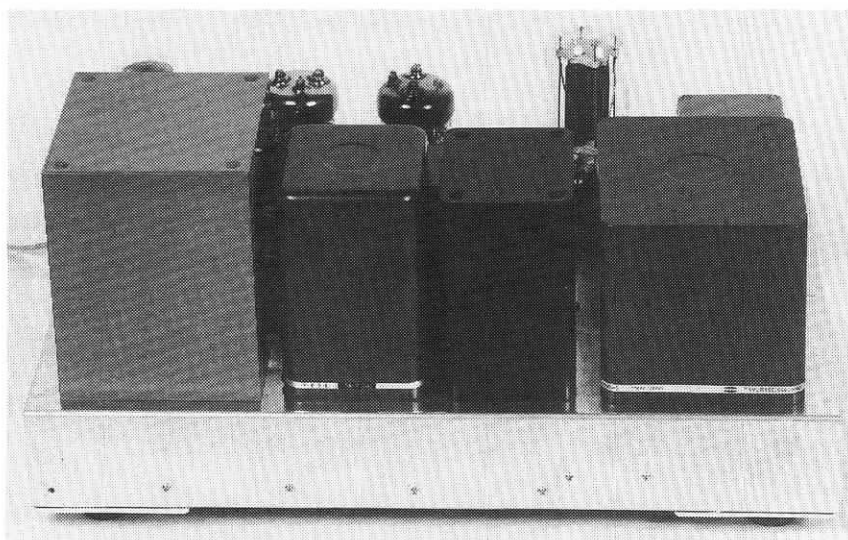


シャーシ内部の配線は、いつものように AC コードを使う

は 500Hz から上を再生する。500Hz から 1200Hz の間は故意にかぶせてある。こうすると狭い部屋でも音の中抜けがない。もちろん大空間の SR では下は 500Hz から 800Hz くらいで切った方が好ましい。

出力トランスだが、一次は 1kΩ pp と 600Ω pp の 2 回路を設けてもらった。6C33C pp の負荷がこの辺が最適ではないかと見当をつけたからだ。1kΩ pp だと 6G-B8 パラ pp の負荷としても充分使えるだろうという目論みもあった。6G-B8 pp のネバリけのあるエナジーの塊りみたいな音もとても魅力的だ。パラ pp にしてもっとグレードを上げてみたい。出力を倍得るのではなく、50W のパワーを楽々と出すゆとりのあるアンプがほしいからだ。

電流は出力トランスの midpoint で 600 mA。片側 300mA ずつという空恐しいほどのスペックだ。だがこのくらいないと安心できない。おそらく 6C33C という球、マックスでこのく



左端から特注の電源トランス、チョーク、ヒーターチョーク、出力トランス

らいはペロリと平らげるのではなかろうか。パワーレベルは 300W、通常の出力トランスではこの辺が限界か。なお形状はカタログ製品の F-2012 と同じものだ。これだけのスペックを秘めながらここまで小さくできたのはコアにアモルファスを使用したからだろう。熱効率がとても良いため形状を小型にすることが可

能なのだ。アモルファスはとにかく音が良い。弾むような低音、そして小気味のよい高音、いずれもトランス結合アンプを対象とした表現なのだ。

電源トランスにふれてみたい。このトランスは僕が今まで見たこともない形状だ。おそらく船舶用の通信機とか防衛庁関係とか、そういうプ



ドライバートランスにもふれてみたい。出力トランスと同じくここにもアモルファスを使用した。音質の面ばかりでなく設計者としては形状の小型化を目論んだにちがいない。カタログの A-351 と同じ大きさだ。7k : 20k pp, DC 100mA, パワー

MJ

るさが愛の不毛を演じるマストロヤンニとエクバグ、そしてドロンとブッティにぴったりのような気がしてならない。

パゾリーニの場合はバッハしかないような気がする。キリストが処刑されるシーンに、シゲッティのヴァイオリンでバッハの無伴奏ソナタ一番のアダージョが流れたらどうだろう。考えただけでわくわくしてしまう。

監督の名前が定かではないが、多分、スペインのブニェルだったか？ この人の「砂漠のシモン」という作品も忘れがたい。時代を超越して砂漠をジェット機が飛んでゆくあのシーン。それと「忘れられた人々」という作品もこの人の傑作ではなかろうか。貧乏な子供達が大人にこづかれながら、ぼろぼろの身なりでメリーゴーランドを人力で回すシーン。今でも目の奥に焼きついている。

それにしても映画はモノクロがいい。カメラワークと陰影美、そしてバックを流れる細工のまるでしてないサウンドトラックの素晴らしい音。カラーになったとたんにこれら全てが人工的に処理されてしまう。もしかすると真の意味で映画が芸術たりえたのはモノクロの時代ではなかろうか。

最近見た映画では「ブレードランナー」が心に残った。モノクロの名作とは正反対の全てが人工的そのものの映画なのだが、21世紀初頭のロサンジェルスとチャイナタウン。多分核戦争後をイメージしているのではなかろうか。いつも酸性の雨が降りしきっている。ハリソン・フォード扮するブレードランナー(特務官)がレプリ(超精密人造人間)を殺すことを命じられラスト近くでわずか4年の寿命しか与えられていないレプリに逆に命を救われる。終焉真近いことを知ったレプリの最後のセリフがよかった。

お前ら人間には信じられぬものを
オレは見てきた

オリオン座の近くで燃えた宇宙船
やタンホイザーゲートのオーロラ
そういう思い出もやがて尽きる

時がくれば

涙のように

雨のように

その時が来た

残忍極まる人造人間にこんな情緒的なセリフを吐かせ、生身の人間のブレードランナーを徹底してヒットマンにした監督の意図に敬意を表したい。この映画あまりにも文明に加担しすぎる現代への警鐘と僕は受けとめた。このシーンにからむサウンドトラックに、ゼビリー・ホリデーを使いたい。ビリーが1946年デッカに残した名唱“GOOD MORNING HEARTACHE”ビリーの愁いを含んだ、それでいながら、よくスウィングするボーカルが、このシーンにピッタリのように想える。

この曲を聞いたパリの一少女がある小説を書き、彼女を一躍有名作家へと押しあげる。その名はフランソワーズ・サガン。そして同名の映画に無名の少女が抜擢され、彼女も一躍スターダムを駆け上がる。その名はジーン・セバーグ。ビリーがうた

った曲こそ「悲しみよこんにちは」だ。

再び 6C33C pp パワーアンプ

ドライバーは 845 だ。6C33C という球、試作機の段階においてとても柔かな、ふくよかな音がするように想えた。ちょっとこもりぎみの音だ。そこでドライバーに強力な直熱管を用いた。ドライバーに直熱管を用いると音が変化する。これは理屈ではない。この手法を経験したものだけが知り得る事実だ。845、これほどのドライバーは他に類を見ない。211 も悪くはないが音が平面的だ。ただ 845 をドライバーに使用した場合ヒーターチョークの使用が必須になる。

6C33C 自体パワーはあるが 845 のようなほとばしるエナジーをこの球に期待することは難かしいという結論を試作記の段階で感じた。しかし純三極管で 50W からの出力が望めるということはとても魅力だ。どちらかというといかにもロシアを想わせる茫洋とした大陸的な風情をかもし出すこの球を、845 で強力にドライブしてスピード感あふれる音にしてみたいというのが今回の意図だ。



入力端子の一方は遊びで、出力端子は 8Ω 負荷が 2 系統

ンがまた格別にいい。ジョー・ヘンダーソンのテナー、デューク・ピアソンのピアノ、ボビー・ハッチャーソンのバイブと身の毛がよだってしまう。僕の愛するハंक・モーブリーのテナーとやった、“STELLA BY STARLIGHT”や“CORCOVADO”。これも実にいい。グリーン Gitar とモーブリーのテナーはなんとも優しく物憂い。

アイク・ケベックの数少ない、リーダーアルバムにもグリーンの名が連なっている。ソニー・クラークのピアノと共演した“BLUE AND SENTIMENTAL”, “IT'S ALL RIGHT WITH ME”, この曲がまた素敵だ。まるでタイトル通りの悲しく淋しい“BLUE AND SENTIMENTAL”。フィリーのブラッシュが冴えわたる“IT'S ALL RIGHT”。アイク・ケベックは、ケニー・バレルのギターと組んだ“LOIE”というボサノヴァの名演も残している。しかし長いヒロイン中毒の果てに肺ガンで早世した。

チャイコフスキーが流れてきた。悲愴の4楽章だ。かのフルトヴェングラがエジプトのカイロでベルリンフィルを振った1951年のライブ。この演奏が実に素敵だ。多分にベートーヴェンの悲愴なのだが、僕が今までに聴いた数多い悲愴の中でこれほど感銘を受けた演奏には今だ巡り会っていない。それにしてもフルトヴェングラはすごい。それとこの6C33C pp, 決して録音状態が良好とはいえないこの名演を、よくぞここまで鳴らしきってくれた。新作のEL156 ppによく似た音だ。中音の浸透力がとてもいい。

レコードを聴いてみた。このレコードについてMJ 7月号にちょっと書いたら、若き友、栗原君がさっそくみつめてきてくれた。マット・デニスピアノの弾き語り“ANGEL EYES”。やはり“ANGEL EYES”はこの人の歌がいい。粹で物悲



何とも武骨な外観の 6C33C-B pp モノラル 2ch パワーアンプ

しくて。ベートーヴェンを1曲聞いてみた。シュナーベルがシカゴと共演した「ピアノコンチェルト第4番」。このレコード、名古屋の友から今朝届いたばかりだ。シュナーベルの細工をしない悠然としたピアノにつかの間の安らぎを得た。1942年の演奏だ。

〔ヒアリング機器〕

パワーアンプ：6C33C pp

EQ アンプ：

50ドライブ50 (アナログ)

6550Ds (CD 用)

CD プレーヤー：ヤマハ・A&D

DAT, ティアック・A&D

スピーカー：アルテック

515 ウーファー, 288 ドライバー×2, 1005B
ホーン

1994年2月末より3月上旬にかけてミラノとパリでのヒアリング会が決定した。厳冬のヨーロッパで、カラスやテバルディのブッチェーニ、コルトーのショパン、フルトヴェングラのベートーヴェン、カザルスやシゲッティーのバッハ、そしてパウエルのピアノとビリーのボーカル。これら名曲の名演を自分なりに表現してみたい。

終章

藤沢周平著「暗殺の年輪」を読み終える。できることならば、この小説をモノクロで映画化してみたい。そしてクライマックスのあのシーンには、カザルスのチェロがよく似合いそうだ。

50のパワーと50のEQに灯を入れ、ローサー・オーディオベクターをつなぐ。「バッハ、無伴奏チェロ組曲、第5番、アダージョ」。

漆黒の闇の中に忍びよる刺客の気配。そしてざわざわと木々を鳴らす一陣の風。この曲まさしく僕が胸に描いた通りのイメージだ。9月末、徳山からの帰りがけにつと立ち寄った嵯峨野の様が目の奥に浮かんでくる。あの日、暮れなずむ空の下、竹林のざわめきを、まるでチェロのように聞いていた。

風が吹きぬけた

あの日

竹林がざわめいていた

秋暮る日